

玖村敏雄のアメリカ教育観

佐々木 司

How did Mr. Toshio Kumura See American Education?
—A Man Who Was Passionate about the Revival of Teacher Training Education
in Post-War Japan—

SASAKI Tsukasa

(Received September 24, 2010)

はじめに

本論は、山口大学の初代教育学部長、玖村敏雄（1896-1968）の遺したアメリカ教育観を整理・検討するものである。

明治29年、山口県都濃郡富岡村（現在の周南市）に生まれた玖村は、大正4年山口県師範学校本科二部を卒業、同県内で小学校訓導を勤めた後、大正15年広島高等師範学校徳育専攻科を修了。広島県師範学校教諭を経て、昭和5年に広島高師教授（高等官七等教育学担当）に就任し、ペスタロッチー研究、吉田松陰研究に打ち込む。昭和19年には文部省教学官となり、戦後は文部省学校教育局師範教育課長（昭和21年）、大学学術局教職員養成課長（昭和24年）を務めた。その後、山口大学教育学部長（昭和28年）、福岡教育大学長（昭和37年）を歴任。昭和43年2月、肝臓癌のため71歳で没している。

玖村を扱った、もしくは玖村に言及した先行研究には、辻（1978）、三好（1991）、千々布（1994）、北神（1994）、北神（1997）、橋本（2003）などがある。師範教育史から玖村を描いた三好（1991）は「この〔教育刷新委員会とCIEとの〕対立の中で、玖村は明確にアメリカをモデルにすることを決意した」と述べている。教育職員免許法の作成でイニシアティブをとった人物は玖村であるとの仮説から、玖村の教員養成観、教育学観を描いた千々布（1994）は、玖村は従来の教育学をドイツ風の観念的なものと批判し、理想とする教育学観のモデルを特にアメリカにおける教育学に求めながらも、その具体像は明確に固まっていなかったとしている。教育学研究の対象としての玖村は、教員養成史のなかの人物として取り上げられてきたわけだが、文部省師範教育課長として教育職員免許法の制定に尽力した彼の経歴からすれば当然であり、またその玖村がアメリカをモデルにしたと見るのも間違いではあるまい。教員養成の大学への格上げが、戦後文部省時代の玖村の悲願であった。

本論はこれらの先行研究とはやや異なる観点から玖村を捉えてみたい。いささか文学的表現になるが、それは「アメリカに遠くて近いところにいた玖村がアメリカ教育（初等中等教育）をどのように見たか」という観点である。玖村はアメリカ教育研究者ではなかったし、ペスタロッチーの教育思想は学んでいたものの、外国教育研究や比較教育学を志したわけではない。彼の晩年が日本における比較教育学の創生期にあたる。玖村は自らを愛国者、国家主義者と呼び、愛国とか国家という考え方を抜きに世界主義というようなことを考えるのは抽象的だと批

判する（玖村「環境としての教師」1955年ほか）。日本民族が民族の国家として自ら立つようになる以外に世界に貢献することはできない。それが彼の持論であった。結果的には難を逃れたものの、戦後数回にわたり公職追放の危機にも直面している。

しかし、愛国者、国家主義者を自認する玖村は、確実に「アメリカ」に近いところにいた。CIEのカーレー女史（Verna A. Carley）を通してアメリカの教師教育の歴史や現状を知った彼が日本の教員養成のモデルにしたのは、アメリカのティーチャーズ・カレッジである（三好1991、p.445；北神1994）。それだけではない。昭和25年4月～8月にはフルブライト人事交流計画に基づき、木下一雄（東京学芸大学初代学長、日本教育大学協会長）とともにアメリカ視察にも出かけている。

実は玖村は、案外と「比較教育学」にも近いところにいた。後に日本比較教育学会初代会長を務めた平塚益徳（1907-1981）は広島高師時代の同僚である。平塚は玖村の古稀記念出版『教育における伝統と創造』（玖村死亡のため追悼論文集となる）の序文を書いている。同書には阿部洋（同学会第9代会長）も論文を寄せている。益井重夫（同2代会長）は山口大学教育学部で玖村と同時期に教鞭を執っている（学科目は玖村が「教育史」、益井が「教育社会学」）。益井は1957年に九州大学に転出、玖村も1960年には山口大学を定年退官するが、その後益井がアドバイザーを務める「国際教育会」の九州地区集会（1966年、集会の名称は「比較教育学ゼミナール」）に玖村は講師として出席している。またそれより前の1959年には、日本教育学会主催の国際教育学会議（世界教育者会議）にも出席している（ただし玖村自身は発表していない）。

アメリカをモデルにしたといわれる玖村ではあるが、彼自身はアメリカに心酔するようなことはなかった。それどころかアメリカとの距離は開き、晩年にはアメリカ教育を批判すらしている。わが国の「比較教育学」にも興味を示した形跡はまったくない。玖村はアメリカのことを知らないが故にアメリカをモデルとして利用し、アメリカのことを知ったが故にアメリカから離れた。筆者はそう捉えている。

以下、3つの時期に区分して、玖村のアメリカ教育観を提示していく。引用中、旧仮名遣いを新仮名遣いに、句読点の打ち方や送り仮名を現代的用法に改めた箇所がある。

1 戦後間もない時期のアメリカ教育観—1947～48年—

多くの教育関係者がそうであったように、玖村は戦後「新教育」の影響を受けることになる。昭和22年夏に発表された玖村による雑誌論文を見てみよう（「再教育の方向」『文部時報』841号、1947年）。そこで玖村はアメリカの新教育運動を強く支持している。

1929年、世界大恐慌時、アメリカはどの国よりも深刻な打撃をうけ、教育界もまた空前の困難に遭遇した。このとき敢然として教育の危機に向かって立ちあがったのはプログレッシヴィストの一団である。・・・このプログレッシヴィストの新教育運動こそアメリカ教育の危機を救い、ある点からいえば今日のアメリカとしたことを銘記すべきである。敗戦日本がいま当面している危機は当年のアメリカと比べようもない〔ほど大きなものである〕。この際たのむべきは心ある教育者の救国的殉教的精神である。

玖村による「新教育」推奨は、翌年、自身が監修した単行本（『新教育の動向』愛知書院、1948年）

としてかたちをなした。玖村自身も一部を執筆し、そこである種の自己批判を展開している。それはドイツの学問の否定、英米的学問の肯定を基調とするものであった。

・・・敗戦をみちびいたものは我々自身である。敗戦にあたいするような在り方において自ら知らなかったのは我々自身である。世界のにくしみを一身にあつめるような考え方を従来の教育はして来たのである。極端な国家主義、侵略主義をかゝげて自らの墓穴を掘るような国民的訓練をして来たのである。我々は心を空しうして明治以来の教育を反省し、敗戦という痛棒をくらって大死一番し、これからの在り方を見きわめて起ち上がらねばならない。・・・学風の刷新という形で論じたい。わが国は古くから仏教や儒教を輸入してこれらの研究が先ず学問の対象であると考えられた。江戸時代に国学が起ったが、これも結局国教という形をとり、ひとしく形而上学的思弁的な学問であった・・・明治以後になって英米仏の学問が入って来たが、二十年代から独逸風の学問が強く学界を支配した。もとより思弁的な学問ばかりでなく、自然科学系統の実験的実証的方面を入ってきた。併し独逸の学問はすべてその民族性の所産たるにふさわしく独逸的であり、理論体系の樹立をねらい、真理のために真理を探究するという態度を主軸として発展する。・・・その弊害としては、しかしながら、実利実益のために学問するとか、人生のために研究するとかいう実学を軽べつする風を生じた。真理として探究せられたことが人生を利することもあり得ることは認めながら、あえて人生のためにという目的から学問をするのをいやしいもののように考えた。

・・・教育哲学・教育史・教育問題・学習指導法等において米国の教育学には著しい実用主義・実証主義・心理主義があり、調査・統計・観察・実験・測定を重んじ、高遠な論や理論体系よりも現実の教育改革にみつぐ成果をねらっている。その学校技術的迫力をもって教育の公立をあげる方向をたどる。平凡な普通の教師でも必ず達し得る一定の目標までを確保させる教育学である。日常社会生活や児童成年の諸要求をこまかに調査し、分析し、これを教育の方法にまで結びつけて行く。医学が病人を診察し、治療の方法を講じて病気をなおすように教育学も個人の診断からはじめて一定の目標に人を導き生長するように助ける技術の学である。私はそういう教育学でもって教育学の完成せられた形であるとは思わぬし、その将来の動向に多大の注目をしている者であるが、しかし現段階までのところでも大いにわが短所を反省せしめられ、少くとも従来の学風に大転換が必要であると感ずる。

戦後、新教育とともに「教育技術」が流行したわけであるが、この当時の玖村は「教育技術」を評価する。

新教育は教育愛を説くよりも、むしろ教育技術をこまかに説こうとする傾向がある。・・・わが国の教育は確かにこの点では不十分であったから、大いにその研究が盛んになり実際に運用されるようにつとめなくてはならぬ。教育は技術ではない、学力さえあれば技術は拙くとも教え得るといふ人達は近頃の教育技術の発達を知らず、またその摘要の効果を見ないものである。教育は技術ではない、子供達への愛と教育への熱さえあればよいといふ人達は愛や情熱が真実のものなら必ずその表現手段としての技術を探求し改善し続けるものではなくてはならぬことを見逃している。技術だけが孤立して教育ができるのではない。学問技芸の力がなければ教える内容がないから、教育はあり得ない。しかし子供への愛がなければ教

えようとする心が具体的に動かないし、動き始めぬなら使いようがない。また技術の改良もその必要が感ぜられない(『今にしてペスタロッチャーを思う』『全人教育』第18巻2号、1948年)。

教育技術を評価する玖村は、2つの対象を批判する。1つは、上記引用中の、学力さえあれば教育はできる、技術は拙くとも教え得るといふ人達である。これは教育刷新委員会にみられたいわゆるアカデミシャンズ論(山田1993、千々布1994)を唱えた人達、旧帝国大学卒業の委員を指すものと思われる。

もう1つは、玖村がいうところの「職人」(他所で玖村は「名人」「名人芸」という表現も用いている)、つまり教科書を中心として、一定の行動様式を固定して、静的な物の見方に立つ、反復が光明を生んでくる教え方をする人達である(『教師養成制度の刷新』玖村文庫内未整理)。わかりにくいのが、これは師範学校出身の教師を含む従来の教育を行おうとする、ないしは行ってきた人達のことを指すと思われる。玖村は、師範教育を批判した教育刷新委員会の「学力さえあれば教育はできる」といふ論を批判しつつも、師範型(に限定されるわけではないが)の教育が「職人風」であったとしてこれもまた否定しているのである。これは千々布(1994)も指摘している点である。

以上、1947年～48年当時の玖村は、アメリカの新教育、教育学、教育技術に対して絶大なる期待を寄せていたことがわかる。

では玖村自身のなかで、このアメリカへの傾斜はどのように整理されていたのであろうか。ペスタロッチャー研究者であった玖村は、この時期、ペスタロッチャーへの思いを記している(『今にしてペスタロッチャーを思う』『全人教育』)

私は去年〔昭和22年と思われる〕の二月、ペスタロッチャー命日に或る師範学校に招かれて記念講演をした・・・久方ぶりにペスタロッチャーを語って自分に強く言い聞かせたことを感じた。それから暇を見つけてはその伝記をよみかえした。・・・いま私共の眼前にはペスタロッチャーが命がけの問題として悩み且つその解決に心身を削ったと同じような重大な問題が山積して居り、見方によってはそれらの問題は一層複雑であり一層深刻であり一層困難でさえある。・・・〔ペスタロッチャー以後も〕世界は依然として教科書中心の教育をつづけ、児童中心、生活中心というような考え方は最近二、三十年の間によく本格的に教育の上に具体化されはじめたといつてよい。アメリカの教育における新教育運動もさかのほればルソオとペスタロッチャーまで行かねばならぬ。アメリカはこの二人から多くの示唆をうけ、それにもとづいて他の老大国が容易に着手し得なかつたような大胆な試みを続けて新しい生活を切り開いた。ペスタロッチャーのものを読んでいて今の新教育に従事することはたしかに愉快であるように思う。

上記のように、アメリカの新教育運動もルソオ(ルソオ)とペスタロッチャーに行き着くのであり、アメリカはこの両名から多くの示唆を得たのであって、今、自分もペスタロッチャーを学んだ後に新教育に従事していることを「愉快」であると述べている。つまり、先ほど「ある種の自己批判」といふ言葉を用いたが、それは完全なる自己否定や懺悔の類ではなく、玖村は過去の自分の延長線上に現在の自分とアメリカがあるという「繋がり」を確認し、自己を受容したように読み取れるのである。

2 視察直後のアメリカ教育観—1950年～52年—

(1) 玖村敏雄と木下一雄のアメリカ教育視察

先述したように、1950年、玖村は木下とともにアメリカ視察を行っている。これは米国の教育事情を視察するようにとのCIEの勧告によるものであった（辻1978、p.393）。国立国会図書館にはCIEに対する2人の視察報告（英文）がマイクロフィッシュのかたちで所蔵されている（GHQ/SCAP Records CIE (D) 02121：玖村、CIE (D) 02118：木下、いずれも英文。以下それぞれ「玖村報告」、「木下報告」と記す）。当時数多くのナショナルリーダーが様々な分野の視察を行うために渡米したわけだが、玖村もその中の一人であった。

“Educational Professional Training”と題された2人の視察の目的は、「玖村報告」によれば、米国の教員養成の実態について学ぶことにあり、そのため教員養成カレッジ、教育省といった機関を訪問し、そこで学長、学部長、局長、大学教員、大学附属学校長にできるだけ多く面会し、運営、カリキュラム、教育方法、図書館などの施設、学校行事について質問し、また議論を交わした。教育省や市学区等を訪問したことにより、教育行政、教員の需要と供給関係、教員給与、現職教育などに関する多くの情報を得ることができたと述べている。

「木下報告」には、滞米中の具体的な訪問先が記されている。日本（横浜港）発着は、昭和25（1950）年4月19日—同年8月23日である。シアトル着後は空路ワシントンDCに向かい、教育省でガイダンスを受けた後、次の様に移動している。

ワシントンDC → ニューヨーク州 → オハイオ州 → ウィスコンシン州 → イリノイ州シカゴ → インディアナ州 → ミズーリ州セントルイス → コロラド州 → カリフォルニア州

訪問先には、連邦教育省、NEA本部、米国議会図書館、各地の教員養成大学（ティーチャーズカレッジ）、コロンビア大学、シラキュース大学、オハイオ州立大学、ウィスコンシン大学、シカゴ大学、インディアナ大学、NEA大会（セントルイス）、コロラド大学、カリフォルニア大学、各地の州教育局、各地の学区などが含まれている。

目的が教員養成の視察であるため、「玖村報告」にもあるように、訪問先は大学（教育学部、教員養成大学）や学区事務局が多かったわけだが、玖村と木下は小学校やハイスクールについても訪問している。例えば、ニューヨークではコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ附属のホレスマン小学校（「木下報告」ではthe Horesman Elementary Schoolと綴られているが、the Horace Mann Elementary Schoolの誤りだと思われる）を訪問している。この学校についてはアメリカの初等教育を代表する学校であると、東京を旅立つときカーレー氏から示唆があったという。CIEに指導を受けたいいわゆる新教育の内容は経験主義の教育であり、その本家本元の実験学校であるから、玖村先生と私の見学は真剣だったと木下は書き残している（辻1978、跋文）。

玖村と木下が滞米中はたして何校の学校（大学を除く小・中・高等学校段階の学校）を訪問したのかは必ずしも定かでないが、「木下報告」からは少なくとも8校を確認することが出来る。これら訪問先学校は大学の附属学校が多いが、玖村が初等・中等学校を視察したことに間違いはない。

(2) 「玖村報告」と『帯米日記』に見るアメリカ教育観—1950年—

玖村は「玖村報告」において、アメリカの印象を述べている（これに対して「木下報告」にはそのような記述はまったくというほどみられない）。合衆国は豊かな国で土地は広く天然資源は豊富、科学技術にもたいへん秀でている。現代的で科学的な文明のお陰で市民は清潔で効率的な生活を送っている。こういった肯定的評価がアメリカ社会全体に関してなされた後、玖村らしく、教育に関して疑問に思ったところをはっきりと述べている。下記6点がそれである。

1. 米国における小学校教員の大多数は女性によって占められている。しかし、私には、小学生達はもっと男性教師を欲しているように見えた。女性教師が多くてはたしてよいのか？

2. 小学校ならびに下級中等学校〔中学校〕では社会科がかなり重視されており、疑うべくもなくそれによって良き世界市民に成長していくように子ども達を教育しているわけである。しかし、果たして子どもたちは教室の外に出て自然を学ぶ機会を十分に与えられているか、疑問に思う。

3. 自立した活動、自立した興味を最も重視することで、子どもたちの教育は成功しているようだし、興味に基づく教育を行う環境作りもなされている。しかし、それで基礎的な技能を学ぶ教科の力は本当についているのだろうか？

4. 生徒や学生は、自分が高めたいと思っている特定分野の学習にはあまり時間を割けないのではないだろうか。試験やレポートの準備に忙しいのだから。

5. まず学士、そして修士を出すという学位の仕組みに反対ではない。しかし博士の出し方には疑問がある。まだ若い学生には博士を出さないということはあるのだろうか。博士とは最高の学位である。それは、これから学者としてやっていこうという若き学徒が受領するものではなく、その人物が学者として極めて傑出していることを象徴するものでなければならないというのが私の意見である。

6. 米国の教育省は学生にも教員にも支援やガイダンスを行っているわけだが、私は、米国が連邦の文部省をきちんと設置し、そこが中央の民主的な教育行政機関として機能した方がよいように思う。

以上は、いずれも視察目的であった教員養成それ自体に関する疑問ではない。「玖村報告」全体を見ても、教員養成の実態に関する記述は皆無といってよい。もっともこの報告は、主として旅行日程と訪問場所を報告する程度でよかつたらしく、「木下報告」にも教員養成の実態に関する記述は見られない。

玖村はアメリカ視察中、『帯米日記』と題した日記を書き残している（山口県立図書館内玖村文庫蔵・未整理資料。ただし、第1巻に相当する日記は紛失した模様で見あたらず、第2巻、第3巻のみが所在する）。そこからは、教育技術（家）への懐疑的姿勢を看取できる。

6月28日（水） インディアナ州ブルーミントン

昨日小生この会〔National Conference on Evaluation Criteria for Teacher Education第1日目〕で教員養成機関といえば直ちに一般教養、専門教養、教職教養を目的だというのが、根本的には若き者達の素質の発展をはげまし助けてその人間としての姿個性の形においてみがき出すにある。これはすべての学校の目的である。このことをぬきにして単なる教育技術家を養成するというに墮するのはよくない。

人間の価値は人間そのものに内在する。その内在するものが身につくについてこれを教養といってもよい。然るに教育技術家本位に考えた教養も、学問的学術技芸も皆教育の手段となる。という意味のことを発言したが、どうも共鳴してくれる者がなかった。

6月29日（木）

John Deweyは先ず神様扱いに近い。Russellがこの会でした第一の講演が全体をleadする。次にはDean PeikとかArmstrongとかいう人達ももっと細かな問題で処理する。各自の経験はこの枠の中で物を言う。経験から出発するという学風はどこまで浸透しているのか。何かしら一種のverbalismに隘する危険はないか。思想する人は少数で、そのwordingについてはいろいろ意見がでる。これは一種の現職教育であるとすれば、やはり大いに意味がある。

記述の意図が分かりかねる部分もあるし、教育技術それ自体を否定しているわけではないが、しかし1947～48年当時のアメリカ教育観、教育技術に対する絶大なる期待と比べれば、その支持は明らかにトーンダウンしている。

（3）鹿児島県「講演会記録」に見るアメリカ教育観—1951年—

帰国後、玖村は講演会でアメリカ教育のことを語っている。教育技術に対して懐疑的な発言をしているかということ、実はそうでもない。

講演内容が速記され、ほぼ完全なかたちで残っていると思われるものが、筆者の知る限り3本ある。他にも、要点だけを記したものがいくつかある。ここではまず、その3本のうちの1つ、「アメリカ教育の印象」（『鹿児島県教育委員会月報』第22号・第23号に集録）から紹介してみたい。これは鹿児島県で行われた講演記録であり、具体的な開催日は記されていないが、記述内容から1951年前半のものだと推測される。

[アメリカの]先生方は、教育の技術ということについては、私は日本の一般の先生よりも専門的な教育を受けておると思います。つまり、いろいろな教育のやり方の、具体的な方法を心得ておる、この点は。この日本の教職に関する学科を終えて先生が哲学めいた理屈を言ったり、原則ばかりを言って、そのやることが、応用された具体的なことをとらえ得なかった過去の過ちが、こういうふうに残っておるのだと思いますが、少なくとも、あらゆる手段を使って、あらゆる方法をもって、自分の教えようとするを子供に徹底させようとする技術を知っておる。この点は非常に大事な点だと思います。日本人は、教育の方法とか、教育の技術とか言えば軽蔑する気味がありますけれども、しかし、方法や技術を持たないで学力さえあれば、いい教員になれるということはないのです。学力があっても、その学力を子供に伝え得ない、あるいはよくできる子供にしか分からないような教育は沢山です。いわゆる途中で落ちてくる学生を作るのは、いい教育じゃない。こういう点を日本の教育家は、もっと教育の方法或いは教育の技術というものを改善してゆく必要があることを痛感いたしました。

・・・大自然の中に泥んこになってという生活はさせてもらう機会が少ないようですね。これは小学校、中学校で特にそういう感じがしますが、このことと女先生の数が多いということの間には関係がないでしょうか。これはわかりませんが、私は何か関係があるよう

な気がしてならない。一般にアメリカの子供は、戸外に出て、太陽の光に当たりながら、自然の子供として楽しむという機会は多く与えられていない。学校においてですよ。学校においては与えられていないのじゃないかと思いますね。

(4) 島根県「講演会記録」に見るアメリカ教育観—1952年—

ところが翌年の島根県における講演会の速記録を見ると、玖村はアメリカの教育は教育技術という立場にあると誤解されやすいし、玖村自身もそう誤解したことがあると述べている（「教育振興のために訴う」『島根大学教育学部同窓会誌』昭和27年6月号）。

・・・新しい教育といってわれわれのやって来た教育の中に生活経験を尊重するという理由で基礎的な教育を疎かにしたという欠点があります。例えば読み方を正確に読み、漢字を正確に書く、あるいは計算を間違いなく早くやるということ。そういうことが非常に疎かになってきました。これは何と申しましても生活経験中心教育の最大の弱点でありましてアメリカでよくいわれることですけれども新教育は自由に過ぎて教育のいわば教材の論理というものが無視される。子供の興味、子供の必要とかいうものにあまりにこだわり過ぎて嫌でもしなければならぬ、基礎的なものを疎かにしている、こうアメリカでは批評されています。

アメリカの教育はうっかりすると教育技術という立場にあると誤解されるのであります。私もそういうふうに誤解したことがあります、確かに日本人は教育の技術というものを科学的に展開するという点では余り優れた能力をもっていなかった。

一体日本人というのは、考え方が非常によくて直感的で理屈は判るが、どうかするとチョコチョコと、ものの本質をつかむとといったようないい能力を持っているんですが、ところがこの能力が優れた人には時には邪魔になることがある。ですから教育の名人になれたんです。しかし優れない人はそれが出来なかった。こういうところに日本の過去の教育方法というものが科学的でなかったということがいえるんです。そうして、個人の天分ということにあまり頼り過ぎていた。こういうことがいえると思うのであります。そこで新しい教員養成では名人芸としての教育者養成なんかは考えないで科学的に技術を与えて科学的にある程度まで大丈夫だというふうな教育の線までつれて行くということが大切であると考えてるのであります。

そういう場合に、日本の教育心理学とか、学習心理学とか、あるいは教育方法論とかいうものは従来経験に頼って名人が名人の経験を分析しただけでありまして科学性がない。誰にでもこの事ならあてはまる。こういう方法をとればある程度の成功はできるといったような客観性がなかった。これを是非とも打ち立てて行きたいと思う。そのためにはアメリカの教育技術に学ぶべきであります。世界で教育の技術に関する限りアメリカほど進歩したところはありませんから、これは今後も学んでしかるべきであります。しかしながらです。そういう教育技術家になれば、それで教育者としてもういいのかと申しますと決してそうではないのであります。

教育技術に学ぶべきである。学ぶべきではあるが、それで教育者として十分であるかといえ

ば、そうではない。こう述べる玖村。では玖村は何を求めていたのか。それは玖村晩年の記述に明確に現れている。

3 晩年のアメリカ教育観—1965年—

昭和40年の雑誌記事（「教師のあり方」『中等教育資料』）には、アメリカの学校が知識技能の教授を主とすることに対する玖村の反対意見が載っている。

国際教育会の九州地区集会が開かれて、私もその席に出た。比較教育学ゼミナールといういかめしい名がついていたが、昨年米国の教育視察に参加した現場の先生方を囲んでの研究集会である。その際、教師の役割という問題もとり上げられ、米国では教師の役割は、学校内のことに限られていて校外のことには関与せぬ。たとえば、高校生の場合校内での喫煙は禁止されており、それを犯せば校則によって処罰される。しかし一步校門を出てからであれば、教師はそれを見ても全然問題にしない。そういうことは、本人または家庭の責任であって、学校の関与する範囲の外にあるとみる。そればかりではない、学校はそれ自身の秩序を保持するに必要な訓育はするが、主たる役割は知識技能の教授にあると見られているようであるという。・・・

教師の役割は知能の開発を主とするといつてよいであろうか。米国では、家庭や教会その他の社会的機関が教育的職能を分担する体制がよりよく発達しているから、学校の教師は校外のことに関与しなくてもよろしいのであるという。・・・いうまでもなく教育は、その行われる場が家庭、学校、社会のいずれであれ、常に全一体の人間を対象とする。このことは、教育の内容や形式が同一であるという意味においてではなく、内容も形式も異なりながら、いつも全体としての人間へのかかわりをぬきにしては行われぬ、そのかかわりに方にそれぞれ特色はあっても、全体の人間を部分に切りはなしてその部分にだけかかわるということでは教育にならないという意味においてである。分かれた部分を集めると、全体としての人間ができあがるということにはならぬからである。だから家庭でも学校でも、ねらいは全人教育にあるのである。・・・米国ではどうであろうとも、わが国では家庭も社会も米国とは異なった姿にあり、その機能も同じようではない。それは教育上必ずしも有利でない状態というほかないかも知れないが、その現実がわが国学校教育の出発点とならざるを得ない。・・・学校は学校としての全人教育のカリキュラムに従って教育に専念する。・・・教育において全人を育て守るということは、なまやさしいことでない。あるいは父兄の要求、子どもたちの興味や偏向におもねり、あるいはテストなどの評価にとらわれ、時の流れにおされてしまう。ここではひとりひとりの子どもに人格の尊厳という見地から対し、単なる道具としての人間ではなく、人間であること自身に目的があるとして守り育てる一徹の誠実さが力である。この誠実さは人間性への限りない信頼という冒険にかり立てる。・・・

玖村は全人教育を支持し、教育は常に全一体の人間を対象とし、全体の人間を部分に切りはなしてその部分にだけかかわるということでは教育にならないという。分かれた部分を集めると、全体としての人間ができあがるということにはならない。アメリカではどうであろうとも、わが国は家庭も社会もアメリカとは異なっており、その機能も同じようではない。子どもはそ

う簡単に自分を教師の前に開こうとはしない。ただ教師の子どもに対する暖かい親切な思いやりの心と、人間性への信頼にみちた態度だけが、子どもの脳を教師の前にひらかせる。そこで教育という仕事が始まるのであるから、教師にはそういうあり方が絶対的に要求される。

4 玖村のアメリカ教育観の整理・検討

戦前、病気の弟を満州に見舞った以外、昭和25（1950）年のアメリカ視察まで玖村に渡航歴はない。ペスタロッチー研究者であった自分が新教育に従事していることを「たしかに愉快である」と述べた玖村、師範教育課長としてCIE（アメリカ）のそばに身を置いていた玖村は、自分の理想とする教育、少なくともそれに近い教育がアメリカにあると期待してアメリカの地を踏んだはずである。その期待は、ペスタロッチーと新教育が繋がるごとく、理想とする全人教育がアメリカの教育と繋がるという期待であったと推測する。

師範学校を再編して新制大学の中に組み入れることに尽力した玖村が、旧来みられた職人技や名人技を否定し「教育技術」に期待を寄せたのは、それによって大学における教員養成を正当化できると考えたからだと思われる。教職が専門職たり得るそのためには、科学的技術により平凡な普通の教師でも力量を一定程度まで引き上げることができる教育学（教員養成における教育学）を、教育学の完成形とは思わぬまでも、玖村は求めた。「教育技術」に頼ったといってもよいだろう。

ところがアメリカの教育は玖村を満足させるものではなかった。その教育が全人教育とは異なることを玖村は視察の段階で悟ったように思われる。外で遊ばない、男性教師と校庭を走り回らない、自然と触れ合うことがない。そういう現実を目にした玖村の思いが文字になったのが、「玖村報告」におけるアメリカ教育に関する疑問であろう。教師の役割・責任が校内に限定されており、訓育も限定的で、知識技能の教授が主であるという「比較教育学ゼミナール」の発表内容についても、大方のところは既知のことであったように思える。玖村はその発表を、驚きを持って受けとめてはいない。あくまで冷やかかである。そして玖村は、「アメリカはアメリカ、日本とは違う」という姿勢を見せるのである。玖村がアメリカの地を踏むことは二度となかった。

おわりに

自分が思うような全人教育がアメリカにあると考え、「新教育」、「教育技術」が、自らが学び、研究してきたペスタロッチーにも通ずると期待していた玖村。しかし、それが誤りであることに気づいた彼の胸中はいかばかりであったろう。

本論は玖村のアメリカ教育観を扱ったものであるが、当時、同様の経験をした者は少なからずいたはずである。「新教育」から「逆コース」という戦後教育界が辿った流れのなかで彼らは何を感じ、何を受容（あるいは拒絶）し、そして自分自身をどう受けとめたのであろうか。

特に、全体の人間を部分に切りはなし、その部分にだけ関わるような教育（つまり玖村が見たアメリカの初等中等教育）を否定する考えは、玖村に限らず日本人に共有されてきた伝統的学校教育観そのものであると考えられる。そのことと、今日、学校や教師が無限定的に仕事と責任を引き受けること、引き受けるよう求めることとの間には関係があるように思う。その意味で、当時の知識人たちのアメリカ教育観を分析することは、現代においても大きな意味をも

つ。玖村のようにナショナルリーダーとしてアメリカを経験した人たちとの比較のなかで、再度、玖村の教育観を捉え直す作業を試みてみたい。

参考文献

- ・ 玖村敏雄「大和民族の精神と使命」広島通信局発行『大和民族の使命と自利自他の生活』1932年。
- ・ 玖村敏雄「憂鬱なる師範教育」『精神科学』第4号、1942年。
- ・ 玖村敏雄「兵庫県の決戦教育」国民学校総合雑誌『日本教育』1944年。
- ・ 玖村敏雄「再教育の方向」『文部時報』第841号、1947年。
- ・ 玖村敏雄「教育活動の源泉」『教育公論』第3巻第8号、1948年。
- ・ 玖村敏雄「教師の指導力－特に中学時代の教師を中心として－」教育問題調査所編『職業科：新しい中学』第1巻第6号、1948年。
- ・ 玖村敏雄「今にしてペスタロッチを思う」『全人教育』第18巻2号、1948年。
- ・ 玖村敏雄「教育刷新の方向」玖村敏雄監修『新教育の動向』愛知書院、1948年。
- ・ 玖村敏雄「教職論」『教育科学』第24号、1949年。
- ・ 玖村敏雄「教育職員免許法関係の施行規則について」『文部時報』第868号、1949年。
- ・ 玖村敏雄『教育職員免許法・同法施行法開設（法律篇）』学芸図書、1949年。
- ・ 玖村敏雄「教員養成の問題を中心として」『文部時報』第858号、1950年。
- ・ 玖村敏雄「教育者の在り方」初等教育研究会『教育研究』第45号、1950年。
- ・ 玖村敏雄「家庭科の教員養成」『家庭科教育』第24巻1号、1950年。
- ・ 玖村敏雄「現職教育のめざすもの」『文部時報』第872号、1950年。
- ・ 玖村敏雄「教育振興のために訴う」（講演記録）『文化講演集』鳥根大学教育学部同窓会昭和27年創刊号1952年（1988年復刻版）。
- ・ 玖村敏雄「教育職員の養成問題」『理想』第215号、1951年。
- ・ 玖村敏雄「教育長の養成計画」『教育委員会月報』第4巻7号、1952年。
- ・ 玖村敏雄「現行法令から見た日本教育の指標」『教育技術』第7巻1号、1952年。
- ・ 玖村敏雄「アメリカ教育の印象（上）」（講演記録）『鹿児島県教育委員月報』第22号、1951年。
- ・ 玖村敏雄「アメリカ教育の印象（下）」（講演記録）『鹿児島県教育委員月報』第23号、1952年。
- ・ 玖村敏雄「教員養成80年」『文部時報』第908号、1953年。
- ・ 玖村敏雄「自然性に立つ教育」『教育と医学』第2巻6号、1954年。
- ・ 玖村敏雄「家庭科教育における人間関係」『家庭科教育』第29巻6号、1955年。
- ・ 玖村敏雄「昭和30年度の初等教育に望む」『初等教育資料』第58号、1955年。
- ・ 玖村敏雄「環境としての教師」昭和30年12月1日米子市立啓成小学校での講演集録（米子初等教育研究会）、山口県立図書館内玖村文庫蔵・未整理資料、1955年。
- ・ 玖村敏雄「教師養成論」『学校経営』第2巻12号、1957年。
- ・ 玖村敏雄「あの頃の回想－教員養成を中心として」大阪学芸大学教育研究所『教員養成制度問題』1959年
- ・ 玖村敏雄「学校経営」『文部時報』第1021号、1962年。

- ・ 玖村敏雄「教員養成の問題－特に基準の問題を中心として」『学校経営』5月号、1963年。
- ・ 玖村敏雄「アジア地域教員養成専門家会議報告」『ユネスコ資料』14号、1964年。
- ・ 玖村敏雄「教師のあり方」『中等教育資料』1965年4月号。
- ・ 玖村敏雄「教師像点描」『文部時報』第1062号、1966年。
- ・ 玖村敏雄編『教育における伝統と想像』玉川大学出版部、1968年。
- ・ 玖村敏雄先生還暦記念事業会『玖村敏雄先生還暦記念論文集』東京出版、1957年。
- ・ 玖村先生の古稀をお祝いする会『玖村先生御夫妻におくる思い出の記』（非売品）、1966年。
- ・ 玖村敏雄「教師養成史稿」山口県立図書館内玖村文庫蔵・未整理資料。
- ・ 玖村敏雄「教師養成制度の刷新」山口県立図書館内玖村文庫蔵・未整理資料。
- ・ 山口大学教育学部内山口県教員養成八十周年記念事業会『研究叢書 現代教育の問題点－教育科編－第一巻』1956年。
- ・ マイクロフィッシュ（GHQ/SCAP Records CIE (D) 02121、CIE (D) 02118）ともに国立国会図書館所蔵。
- ・ 辻信吉『玖村敏雄先生伝』ぎょうせい、1978年。
- ・ 三好信浩『日本師範教育史の構造－地域実態史からの解析－』東洋館出版社、1991年。
- ・ 山田昇『戦後日本教員養成史研究』風間書房、1993年。
- ・ 千々布敏弥「玖村敏雄の教育学観について」九州大学教育学部教育経営教育行政学研究室『教育経営教育行政学研究紀要』第1号、1994年。
- ・ 北神正行「戦後教員養成カリキュラムの形成：教職教育の内容と構造の分析を中心に」岡山大学『研究集録』第95号、1994年。
- ・ 北神正行「戦後教員養成カリキュラムの形成過程に関する研究：文部省「学科課程案の研究について」（1947年）に対する師範学校の回答文書の分析」岡山大学『研究集録』第104号、1997年。
- ・ Harry Wray, "Attitudes among Education Division Staff during the Occupation of Japan," *Nanzan Review of American Studies*, vol.19, no.2, 1997.
- ・ Harry Wray and Fumiyo Nakagawa, "Controversies over Teacher Education Reform and Normal Schools during the Allied Occupation of Japan," 『桜花学園大学研究紀要』第3号、2001年。
- ・ 橋本美保「占領期における師範学校附属学校の自己改革運動－全国国立大学附属学校連盟によるアメリカ教師教育カリキュラムの受容－」日本教育学会『教育学研究』第70巻第3号、2003年。
- ・ 山崎 奈々絵「教育刷新委員会の学芸大学構想：教員養成における一般教養の位置づけを中心に」お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科『人間文化創成科学論叢』第11号、2009年。

注

- ¹ なお平塚も玖村とはほぼ同時期に同プログラムでアメリカ視察をしている。
- ² 外国教育研究の面白さの源泉には、研究者に内在する自国の教育という「測量点」があるわけだが（馬越徹『比較教育学－越境のレッスン』東信堂、2007年、第2章）、同一測量者でも「測量意欲」は変化し得るし、内在する「測量点」もまた自らの置かれた立場、あるいは経験や

年齢などによって移ろうであろう。本論においてこの点を十分示し得ているとはいえないが、玖村の文献研究を進めながら発表者はそういう思いを抱いた。

³ 本論を執筆するにあたり、山口県立図書館に所蔵されている玖村が遺した未整理資料を閲覧し（段ボール箱18箱分）、また玖村の雑誌論文などを可能な限り渉猟した上で、整理・検討を行った。それらは「参考文献」に記してある。

⁴ 辻（1978）には、玖村がアメリカから帰国して家族に土産を披露するも、妻ツヤへの土産がなく、荷物を梱包しておいた紐を土産にするという場面が描かれている（p.265）。二女郁子は父玖村を咎めるが、玖村も妻も笑っている、という情景描写でそれは終わる。しかし『帯米日記』には次の様にある。帰国の船内で、玖村は最後の15ドルで妻に何か土産物かと思ひ洋服を選ぼうとする。しかし同乗していた農林省職員から「やめておきなさい。こんなはで[派手]なものは僕の家にだって東京では着せられない」と「強硬反対」されてしまう。手提げバッグにしようかと値段を見るも21ドルで買えない。結局、玖村は子供用に万年筆を買う。玖村は妻への土産を心配していたのである。なお、郁子は後に東京大学教育学部教授になる持田栄一（当時、国立教育研究所勤務）と結婚。玖村が山口に帰任するのと同じ昭和28年春のことである。